

日本における S. R. Ranganathan ブーム: その契機

志保田 務

(桃山学院大学名誉教授)

The S. R. Ranganathan Boom in Japan: Its Origin

By Tsutomu SHIHOTA

(Emeritus Professor of St. Andrew's University)

抄録

Shiyari. Ramamrita. Ranganathan (1892–1972: S. R. Ranganathan) および彼の著作は、日本において高く評価されている。その人気は一定の時期、間隔をおくような流れをもって日本内でブームを繰り返している。これは S. R. Ranganathan のインド本国に匹敵するかのような現象である。本稿はこのブーム発生の契機とその理由を考究する。また、その後の何波かのブームを掛け合わせ、それらに通底する要因を探る。

Abstract

Shiyari. Ramamrita. Ranganathan (1892–1972: S. R. Ranganathan) and his writings have been highly evaluated in Japan. The booms of his writings are repeated at a certain interval. In this paper, I will examine and comment on the overview of the research on him and his writings in Japan in relation to the environment of the times, the circumstances of the library world, and preference of the Japanese.

1 西洋型図書館学との接触

大衆が主役である西洋流の図書館の紹介は、福沢諭吉の『西洋事情』に始まるが、市川清流 (1824–1879)、町田久成 (1838–1897)、田中不二麿 (1845–1909)、続き手島誠一 (1849–1919)、田中稲城 (1856–1925)、和田萬吉 (1865–1934) などの留学経験者がものした¹⁾。彼らは 1870 年代を皮切りに、大学 (教員)、官庁 (官吏) の職に就き、旧幕府に属した書籍所蔵施設の開設・運営、その他、図書館に関する機構・案件の策定に館界を牽引した。この時期以前に欧米では関係専門書として Martin Schretinge²⁾ が『図書館学全教程試論』(第 1 編 1808 年:1835 年第 4 編完了)、『図書館ハンドブック』(1835 年) などが既に出されていた。英国では 1841 年大英博物館の「91 か条目録規則」が当時同館刊本部長の Anthony Panizzi (1797–1879) 中心に策定された。その部下 Edward Edwards (1812–1886) は『図書館覚書』を出版 (1859 年) したが、それは、英国下院議員 William Ewart (1798–1869) と組み無料制の英国公共図書館法を立法させた (1850 年) 実績に基づいている。米国では C. C. Jewett (1816–1868) が大英博物館規則に倣って 39 ケ条の利用者用目録規則を策定し

た(1852年)。このように西洋図書館学の基礎が既になっていた時期である。なお「西洋」は福沢等のいう西洋、欧米各国を示し、「図書館学」とは図書館全般に関する思考(学問)、制度、實際を指すものとして用いる。

それらは当時の日本図書館界に縷々刺激を与えたが、なかでも、決定的影響をもたらしたのが1876年の米国図書館協会(ALA)、翌1877年の英国図書館協会(LAUK; 1896年LAと改称)の設立であり、それに伴う *American Library Journal* (1877年 *Library Journal* に改題)、LAUKの *Monthly Notes* (1880年) などその機関誌が伝える図書館関係の情報であり、件名分類法で有名な James Duff Brown (1862–1914) が1898年に創刊した *Library World* が当分野の有力誌だった。1850–1930年時期は英米の図書館史学界にとって「冷たい事実史の時代(第1世代)」であった。たとえば米国では、Melville Dewey (1851–1931, 以下: M. Dewey) や Charles Ammi Cutter (1837–1903) などの関係した図書館、図書館関係組織とその技術・手法についての論述が大きな座を占めていた³⁾。日本館界の有為者たちの目は、米国中心の図書館技術、図書館教育に釘付けされた。

2 日本の先駆者たちによる西洋図書館学の修得、導入: その初期

上記開拓者に続き、渡辺徳太郎(1870–1946)、西村竹間(1850–1933)、島文次郎(1871–1945)、太田為三郎(1864–1936)、湯浅吉郎(1857–1943)、佐野友三郎(1864–1920)などが語学力を活かし、関係洋書文献の入手、解読、翻訳等をもって、西洋の図書館情報を入手し実用を図った⁴⁾。国家中央図書館の設立や、関係法令、整理技術、関係テキスト・マニュアル等の策定がそれである。殊に佐野友三郎はその学びを、秋田県立、山口県立両図書館を場実践した⁵⁾。こうして、図書館学研究世代として上記の第一期にあたる頃、1920年代までの時期に関し、我が国の館界の状況を確認しておく。

1872年 文部省書籍館の設置(以後、帰局部局、名称、設置場所等を転々とした)。

1889年 東京図書館官制。国立図書館の格を付与(←書籍館。1897年→帝國図書館)。

1892年 日本文庫協会創立(1908年 日本図書館協会と改称)。略称は共に JLA。

西村竹間『図書館管理法』(金鯢堂書店)。

1893年 日本文庫協会編『和漢図書目録編纂規則』太田為三郎筆。

1899年 図書館令公布(勅令429号): “有料可”の規定。

1900年 文部省『図書館管理法 全』(田中稲城筆)。

1901年 関西文庫協会機関誌『東壁』発行(4号迄で終刊)。

1902年 県立秋田図書館巡回文庫開始(一名; 巡回書庫, 館長: 佐野友三郎)。

1903年 山口県立図書館開館(館長: 佐野友三郎): 自由開架席400, 児童室設置。

1907年『図書館雑誌』発刊。

1909年 山口県立図書館十進分類法(DC模倣)策定: ニューアーク式貸出方式採用。

1910年 図書館令改正(勅令278号)。小松原英太郎文相「図書館施設に関する訓令」。

1911年 佐野友三郎『師範学校教程図書館管理要項』(米国教育会図書部特別報告: 翻訳: 自費出版)。

山口県立図書館利用者の書庫入を許可。通俗図書館規程。

1912年 文部省『図書館管理法 全』改訂版発行。

1915 年 JLA『図書館小識』を全会員、全知事などに無料配布。
佐野友三郎「通俗図書館の運営」(『山口県立図書館報告第 20』)。
佐野友三郎 アメリカ図書館大会参加を兼ね渡米 4 ヶ月 (JLA が出費)。
1918 年 田中敬 (1880–1958)『図書館教育』(同文館)を著作、出版。
1920 年 佐野友三郎自殺。その二日後、佐野友三郎『米国図書館事情』(JLA)出版。
1921 年 文部省図書館員教習所開設。
1922 年 和田萬吉『図書館管理法大綱』(丙午出版)。
1923 年 関東大震災により、全国で 120 万冊消失、東大図書館、大橋図書館等被災。
1924 年 この年の全国図書館大会 (第 18 回) で、文部大臣「国民思想善導ニ関シ図書館ノ採ルベキ最良方案如何」を諮問。
1925 年 治安維持法公布。普通選挙法公布。田中稲城自殺。
1926 年 図書認定規定公布 (文部省令第 2 号: 1913 年の通俗図書認定規定の公布)。
『図書館雑誌』11 月号から間宮不二雄 (1890–1970) に編集委託。翌年解任。
1927 年 前年末に設立の青年図書館員連盟が機関誌『團研究』発刊。南京事件勃発。
1928 年 JLA 理事長に松本喜一 (1881–1945) 就任。
JLA 全国図書館大会: 文部大臣「輒近我が国ニ於ケル思想ノ趨勢ニ鑑ミ図書館ニ於イテ特ニ留意スベキ事項如何」と諮問。
1929 年 森清 (1906–1990)『日本十進分類法』(間宮商店)から出版。
文部大臣、教化総動員に関する訓令を発する。

3 1930 年代と図書館，図書館学

3.1 海外の図書館事情

先に第 1 章. 末に記したように 1850–1930 年時期 (図書館史学界の第一世代)、英米は「冷たい事実史の時代」であった。M. Dewey を「偉大な規格化者」と重視し過ぎていた。だが 1923 年 Charles Williamson (1877–1965) がカーネギー財団の依頼・出費で編んだ「ウイリアムソン報告」は欧米館界に落雷のような衝撃を与え 1920 年代を通じシカゴ大学などで大変化 (正式学部化、司書に対する社会的評価の実現) をもたらした 6)。

英国でも図書館学教育に関し、独仏における高踏的な伝統と対照的ではあるが、実地主義が主力であったが、1919 年ロンドン大学に図書館学科が創設され、学問的な方向に動いた。クロイドン図書館長で公共図書館経営及び図書館分類法における権威であった William Charles Berwick Sayers (1881–1960) が教鞭を執るに至る。彼を中心に同大学図書館学科は 1925–35 年シラバスを改訂し、学術的なものと実際の業務に分け、両者を正しく統合する方針に改め、実施して行った 7)。この大学のユニバーシティ・カレッジ図書館学部は、1924 年 10 月インドのマドラス大学図書館長 Shiyai Ramamrita Rnganathan 修士 (数学) が留学した。彼は、ロンド大学教員に出仕していた W. C. Berwick. Sayers が館長を続けたクロイドン市立図書館で半年勤務、100 程の図書館を見学し

1925 年 7 月帰国。1931 年の *Five Laws of Library Science* 8), 1933 年 *Colon Classification* 9) (以下, CC) を出した。1928 年 K. V. K. Aiyar 博士とマドラス図書館協会を設立 10)。英国支配下の祖国の自由と社会発展のための国民運動, 国民会議に参加, 同図書館協会はそのための会合の拠点となった。

3.2 日本の政情不安と図書館界の対応

言論弾圧, 出版規制など政情悪化。この時期初期に佐野友三郎と田中稻城の自殺, 松本喜一の JLA 理事長就任があり「自由で民主的な図書館思想が失われた」と言える 11)。

1931 年 満州事変勃発 (柳条湖事件)。石川県図書館協会 (会長=中田邦造: 1897–1956) 読書学級開始。その運動を県一帯で展開。

1932 年 五, 一五事件勃発。第一次上海事変 (その第二次: 1937 年)。

1933 年 2 月, 国際連盟は日本の満州からの撤退勧告案を英米の主導で可決。

翌 3 月, 日本は同連盟へ脱退を通告。7 月 図書館令改正 (勅令 175 号)。同令に新設の「附帯施設」について, 文部省と JLA (中田邦造) の間で論争

1934 年 文部省主催, 良書普及会 (第 1 回) 開催。

文部省主催, 読書指導講習会 (第 1 回) 開催。

4 言論弾圧の政情と S. R. Ranganathan への接近

4.1 アジア人 S. R. Ranganathan への接近

上海事変以降, 日本では自国の中国侵攻を酷評する英米への憎悪が煽られ「鬼畜英米」, 「“敵性語”排斥」を叫ぶ社会情勢があった。洋書, 洋雑誌の輸入, 購読に関する規制も強まった。“敵性語”として欧米語の排除で, 西洋を模範とした日本の館界は苦境に陥った。

竹林熊彦 (1888–1960) は, アジア人, インド人である S. R. Ranganathan (以下, ランガナタン) の *Five Laws of Library Science* (以下, FLLS) に目をつけた。原書は巻頭に“図書館の Five laws”を掲げていた。竹林はその第 3 章 (Second Law and Its Struggle) を『図書館雑誌』上に訳出した (1935 年)。彼は青年図書館員連盟の中心会員で同連盟の機関誌『図研究』に分類法の論文訳出を重ねる九州帝国大学附属図書館の司書官 (当時: 今日の相当職位は図書館事務部長) で, 弾圧はさほど厳しくなっていなかったと見られる。

「現代図書館運動概説」と訳タイトルを与え 12), “Five laws”を「五則」と訳した。原書第 3 章に限定の訳だが, 章名 “Second law and its digvijaya (world conquest)”は和訳されていない 13)。竹林は, タゴールと M. ガンジー を持ち出し「インドの思考は日本で評価される」と記し, 対象がアジアの著者の論文であると頭部で強調した。これは英米思想に対する取り締まりを回避する策であったが, その内容への賛意を強く表した。

竹林の訳は編訳だが, 世界各国の図書館運動を示す概容は直射している。原著者の意図は進んだ事

例のインドへの導入であり 14), 竹林は日本においても同旨の実現を望んだ。

4.2 FLLS (五則) の日本への導入

原書は冒頭に五則を掲げ、本文はこの 5 則を軸に形成されているが、全 8 章立てである。

竹林はこの五則をその抄訳の頭部の文中の記述に取り入れた。表 1 に見るように、原書とは少々異なるところがある。対照してみよう。

表 1 原書が表示した形の五則と、竹林が表示した形の五則と訳文

原書が表示した形の五則	竹林が表示した形の五則と訳文
1 BOOKS ARE FOR USE	Books are for use 図書は利用すべきものなり
2 EVERY READER HIS BOOK	Books for all すべてのものに図書を与へよ
3 EVERY BOOK ITS READER	Every book its reader あらゆる図書をその其読者に
4 SAVE THE TIME OF THE READER	Save the time of the reader 読者の時間を節約せよ
5 A LIBRARY IS A GROWING ORGANISM	A library is a growing organism 図書館は発展的有機体なり

表 1 の右欄、竹林の表出した形には、原文と少しばかり異なるところがある。

まず、第 2 則の英文が全く異なる。原文の EVERY READER HIS BOOK に代えて、Books for all とした。原書 3 章の本文冒頭部分の用語から代入したと見えるが、原文における標語形に代えている。これは原文の第 2 則中の“HIS BOOK”が女性を排除したとの感を与えるからであろうか。この処理は、後に発生するランガナタンブームとでも称すべき日本に生じた現象に出る性差別面の批判を先見したかの観で、評価できるが、五則の表示上に揺れを与えた。後の多くの論者は第 2 則に関して竹林の“代入”形に倣っている。ただ、今まど子は「Every reader his or her book」と“her”を独自に補った 15)。また図書館問題研究会・学校図書館問題研究会編の用語辞典は「Books for all あるいは Every reader, his book」と気を遣っている。原文から牽いた文節に「,」を加えているのも興味深い 16)。

ただ、同書は第 4 則“Save the time of the reader”を“Save the time for reader”と変な表現にし、第 5 則では原文の“organism”を“organization”とした。異様の観がある。さらに、日本で唯一の“完訳本”とされる森耕一監訳書の冒頭には 17)、原書冒頭部にある五つの則の英語表示をせずに日本語訳だけで五則を記している。訳者は“訳書ゆえ原語部分の付記は不要”としたのかもしれないが、逆に原書名 *The five laws of library Science* を訳書の副書名としている。ちなみに第 2 則にあたるものとして「いずれの読者にもすべて、その人の図書を」と竹林に近い表現をしている。これに似た訳として第 2 則を「すべての読者は自分自身の本を持っている」と異なる意味と言わざる得ない訳をしている著作もある 18)。

次に気に懸かるのは、竹林を初めとして、英語表現に付設した和訳文において、原文における標語

的表現ではなく、文章体の訳文となされていることである。分かり良さに懸けて限定して説明すると、第3則の Every book its reader の日本語訳が原書におけるこの標語形でなく「いずれの図書にもその読者を」などと、文書体としていることである。こうした翻訳法は語学上誤りととられかねず、一般社会での通用が難しいことがある。

5 まとめ

以上批判めいた記述も行ったが、原著者の本意は、インド図書館界の進展にあった。図書館サービスの進展は、読書指導などの暗雲が覆っていた日本においても竹林が運動の方向性として望んでいたことであり、それがその後のブームをもたらしたのであろう。

太平洋戦争下の暗雲は続き、1945年8月の終戦。その少し後まで図書館学の研究は日本において展開しなかった。その後、米軍指導による民主化が進み1950年4月「図書館法」ができ、公共図書館の専門的職として司書及び司書補を規定。その資格養成のための講習科目を掲げた「図書館法施行規則」が同年9月6日制定され、司書の場合15単位(後に19, 20, 24単位)以上の取得を義務付けた。1950年当時の科目の一つに『図書館の対外活動』があった。竹林熊彦はこの科目に向けて『図書館の対外活動』を著した(19)。同書は冒頭の〈序章〉に「図書館学の五法則」と章名を付け、FLLSを「図書館の神髄」と称賛した。竹林は当時最も力のある図書館学者の一人であり、FLLSの日本における受容が固まった。ただし椎名六郎は(20) FLLSが「学と称するけれども、図書館の科学研究や認識ではない」という、かれがその批判に答えて出したものが、1957年の第2版である。」と記した。この“Five Laws”を「五法則」と訳す形がその後ほとんどとなった。また五則の標語的表現を文章体とする訳が大半である。語学面では問題なしとしない。

1957年発行のFLLS第2版においても第2標語の表示形に“his”の表現が続いた(21)。しかし日本ではこの第2則の標語として“Books for all”との形をとる表示が多い(22)。

ランガナタンの死後50年を記念して著された二つの国際大会研究発表に主要な起源を有している(23)(24)。後者の大会発表において「なぜ日本でのランガナタン人気が高いのか」との質問があった。この質問に答えるべく、また、同発表稿自体で具体的言及ができなかった「ブームの理由」説明を補うべく記したのが本稿である。

FLLSに対する批判の中には、「同じことの繰り返し」でないかという疑問がある。また、90年前の著作で、特段の強調は不要ではないか、インド古代思想の欠点(男尊思想)があるとも指摘がある。第2標語に関しての「HIS」表現の採否が代表例である。

しかし日本における数次のランガナタンブームは上記発表のとおり揺るぐものがない。

CCに関連した論考もFLLSブームほどではないが出た。ただここでは指摘にとどめる。

1935年 『図書館雑誌』へ紹介・訳(FLLS: 竹林熊彦), (CC: 大山綱憲 25))

1950年前後 FLLS: 図書館法制定に基づく司書養成科目の成立とテキストへの掲載
(FLLSを「神髄」と評価した竹林熊彦の力が大きい(26))

CC: 国内汎用の図書分類法策定・決定の動きに呼応した比較材料となる

1980年前後 FLLA: 日本語訳の出版。FLLSを「発見」とした森耕一の評言(27)

CC: 図書館機械化との関係。山田常雄 (1941–1988) 関係書訳出 28)。
2020 年前後 FLLS 竹内哲 (1927–2021) の営為 29)。ランガナタン記念特集等。
吉植庄栄 30) による継続的研究, 発表
日本図書館文化史研究 2022 年度研究大会テーマとなる 31)
日本図書館研究会 64 回研究大会シンポジウム 32)
CC 同著の改版が 1987 年第 7 版で停止後日本での研究は顕著でない。

ランガナタン人気は, 例えば, 日本の館界が余程世話になったと思われる M. Dewey の死後 50 年にあたる 1980 年前内外の時期においてブームめいた記事があまりない 33) ことと比べて興味深い。両者は図書館を基盤として社会に大きな成果をもたらしたという点は類似するが, 外国支配を経験しカースト制と闘うランガナタンには図書館求道者の姿を見る。その人柄こそがブームを繰り返す震源ではないかと考える 34)。

本稿はランガタンブームの一端, その契機を廻る検討にとどまった。契機のと数回発生したブームの諸相については, 上記の国際発表ですでに概形を示しているゆえである。ただし, 今後このブームを, パラダイムという形で再確認する続稿が現出することを望みたい。

本稿の仕上げには, 岡田大輔氏, 面地豊氏, 中道厚子氏, 中村恵信氏, 藤井兼芳氏, 前川和子氏, 村上幸二氏, 本山晶子氏, 山田美雪氏ほかの方々にお助けを得た。深く感謝する。

注

- 1) 日本図書館文化史研究会『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 2017 依拠。
- 2) 河井弘志『マルティン・シュレティンガー: 啓蒙思想と図書館学』日良居タイムス, 2012, 268p. シュレティンガー, M. (石田俊郎訳)『図書館ハンドブック』京都図書報学研究会, 177p. Martin Schretinger (1772–1851) の略歴は前掲 1), p.327–328 参照。
- 3) 川崎良孝「Sidney Ditzion と図書館史研究: “The Anglo-American Library Science” を中心として」『図書館学会年報』30(4), 1984.12, p.146–147.
- 4) 日本図書館文化史研究会, 前掲 1)。
- 5) 佐野友三郎 (1864–1920) が M. Dewey から得ていた情報について森耕一 (1923–1992) は記す。「[デューイは] ニューヨーク州立家庭教育学部の報告書の一冊として, 『動く図書館』 (Traveling Libraries) を公にしている。(中略) ニューヨーク州立図書館の年報を入手して巡回文庫のことを学んだのであろう。」(森耕一『近代図書館の歩み』至誠堂, 1986, p.150)。なお, 中山愛理『図書館を届ける: アメリカ公共図書館における館外サービスの発展』学芸図書, 2011, p.23 も参照。
- 6) 小倉親雄『アメリカ図書館思想の研究』日本図書館協会, 1977, p.299–302.
- 7) 同上, p.302–310.
- 8) S. R. Ranganathan, *Five laws of library science*, Bombay Asia Publishing House, 1931, 449p. 本稿では Five laws 全体は “五則” とし, 単一の law は “第 5 則” のような形で表した。
- 9) S. R. Ranganathan, *Colon Classification*, Madras, Madras Library Association, 1933, x. 127, 136, 106p.

- 10) Madras Library Association, *Welcome to Madras Library Association!*. <<https://www.madraslibraryassociation.com>> [引用日: 2022.1.31]
- 11) 東條文規「日本の近代化と図書館の政治学」『日本の植民地図書館: アジアにおける日本近代図書館史』社会評論社, 2005, p.17-57.
- 12) S.R. ランガナタン (竹林熊彦抄訳)「現代図書館運動概観其一」『図書館雑誌』29(4), 1935, p.95-103, 「其二, 完」『図書館雑誌』29(5), 1935, p.116-124, 126.
- 13) この“digvijaya (world conquest)”を S.R. ランガナタン (森耕一監訳)『図書館学の五法則: The five laws of library Science』日本図書館協会, 1981, p.133 は「浸透」と訳した。なお同書は原著第 2 版の訳だが, 奥付等に版次の書誌表示がない。
- 14) S.R. Ranganathan, *op. cit.* 8), p.189. (項番 388 Manu Maxim)
- 15) 今まど子編著『図書館学基礎資料』第 11 版, 樹村房, 2013, p.64.
- 16) 図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房, 2004, p.388.
- 17) S.R. ランガナタン, 前掲 13) (森耕一監訳本) p.9.
- 18) 石塚正成『図書館通論』改訂増補, 明治書院, 1978, p.62.
- 19) 竹林熊彦『図書館の対外活動』蘭書房, 1956, p.17.
- 20) 椎名六郎『図書館概論』学芸図書, 1960, p.22.
- 21) Allen Kent et al., *Encyclopedia of library and information science*, v.26. M. Dekker, 1978, p.61. “Every reader his book”.
- 22) 椎名六郎, 岩猿敏生『図書館概論』雄山閣, 1977 など。
- 23) Tsutomu Shihota, Zensei Oshiro, Kazuko Maekawa, Yoshinobu Nakamura, and Toma Makoto “An Analysis of S.R. Ranganathan’s Influence upon Librarianship in Japan,” *Proceedings of the 6th I-LISS International Conference*. India, BS Publications, 2022, p.25-29.
- 24) Tsutomu Shihota, Son Ji Hyeon, and Miyuki Yamada “A study on the acceptance and adaptation of Ranganathan’s theory in Japan,” in the 6th KLISS International Research Conference, Kyungpook National University, Oct.21, 2022.
- 25) 大山綱憲「コロソ分類法」『図書館雑誌』29(6), 1935, p.145-157. 日本での最初の CC 紹介・解説。大山は CC を「卓見であり分類理論の一大革命」(p.145) と評価。
- 26) S.R. ランガナタン, (竹林熊彦抄訳), 前掲 12).
- 27) S.R. ランガナタン, 前掲 13) 森耕一による p.412.
- 28) J. ミルズ (山田常雄訳)『現代図書館分類法概論』日本図書館研究会, 1982, p.108-122.
- 29) 竹内愼『生きるための図書館』岩波書店, 2010, p.145-157. (岩波新書 1783), ランガナタン著, 竹内愼編『図書館の歩む道 - ランガナタン博士の五法則に学ぶ』日本図書館協会, 2010, 295p. (JLA 図書館実践シリーズ 15), 竹内愼編『「図書館学の五法則」をめぐる 188 の視点: 『図書館の歩む道』読書会から』日本図書館協会, 2012, 160p. (図書館実践シリーズ 20) など。
- 30) 吉植庄栄の関係著作: 「吉植 庄栄 - 盛岡大学・盛岡大学短期大学部」<<https://morioka-u.ac.jp/faculty/professor/yoshiue-shoei/>> [引用日: 2022.1.31]
- 31) 日本図書館文化史研究会『ニューズレター』163, 2023.2, p.11-14.

- 32) 「日本図書館研究会第 64 回研究大会 (ご案内) シンポジウム「図書館学の五法則」の実践 [ランガ
ナタン没後 50 年記念]」『図書館界』74(5), 2023.1, 巻頭前付ページ.
- 33) M. Dewey 批判の一例に下記の著作がある。Wayne A. Wiegand (川崎良孝, 村上加代子訳) 『手
に負えない改革者: メルヴィル・デューイの生涯』京都大学図書館情報学研究会, 2004, 494p.
(原著: 1996 年)
- 34) S. R. Ranganathan, *op. cit.* 8), p.388.